Interview
さくらだより
vol. 21
2022年9月20日発行

八巻（やまき） 誠（まこと）

今回スポットをあてるのは、2018年3月にさくら株式会社に入社した八巻誠。20年以上にわたってこの業界に身を置き、その豊富な知識と技術を生かして数々の現場で力を発揮している。さくらとの出会いを振り返りながら、仕事に対する熱い思いを聞いた。

経営者から、さくらの社員に

「たとえ学歴がなくたって、リーダーシップを発揮して働くことはできる」。

業界に飛び込んだのは、16歳のときのこと。当時お世話になっていた親方にかけられた一言は、八巻の心を強く打った。一つひとつ知識と技術を身につけると、親方の言葉に背中を押されるようにして24歳の若さで独立。会社を設立すると、13人ほどの従業員を率いて新たな一歩を踏み出したのである。様々な現場に立つ中で、実に多くの出会いがあった。その1つが、さくらだ。社長の高橋を筆頭に人間味あふれる社員たちが集まるさくらを、八巻はすぐに好きになったという。そんな中、高橋が発した何気ない一言が転機となる。

「これからは、さくらの社員としてやっていかないか」。

さくらでなら、きっとやりがいを持って生き生きと仕事ができる……確信に似たそんな思いを感じ、八巻は首を縦に振った。こうして2018年、さくらの一員となったのだ。

いつでも全力で

長年にわたって協力会社として手を取り合ってきたため、八巻とさくらの間には強固な信頼関係があった。仲間たちも温かく迎え入れてくれ、すぐに職場になじむこともできた。現場ごとに苦労はあるが、どんな現場でも「全力で取り組むだけ」だと、力強く語る。手を抜かず、担当する作業に心を込めて丁寧に向き合う。16歳で働きはじめてからずっと、そうやって歩みを重ねてきた。

中でも大切にしているのは、確認作業。特に神経をつかうのは、溶接前の仮留めだ。この段階で間違いに気づけば、手間をかけずに修復が可能。材料のロスも少なく、工期に響く恐れもない。一方で、溶接が終わってから間違いが見つかった場合には、一筋縄ではいかない。材料が特殊なものだった場合、発注してもすぐに手に入るとは限らないからだ。工期には遅れが生じ、コスト面でも大きなロスになる。お客様との信頼関係にヒビが入ってしまう可能性もある。そうならないよう、溶接前には図面と現物をしっかり見比べて確認作業を徹底しているという。

「内作においても注意が必要です。1ミリ刻み、あるいは0.5ミリ刻みで材料を切っていくため、細心の注意を払わなければなりません」。

明るい雰囲気の現場をつくるために

スムーズに現場を進めるためには、メンバーたちとのチームワークも重要だ。挨拶や業務上の情報共有はもちろん、時間を見つけては積極的に声をかけ、少しでも言葉を交わすよう心がけている。ときには冗談を飛ばして場の空気を和ませ、若手からベテランまで一人ひとりがリラックスして作業を進められるように意識しているという。仕事中はこまめに現場をまわり、一つひとつの箇所に細かく目を配る。ミスの起こりやすい場面では何気なく注意を促し、トラブルを未然に防ぐ努力も忘れない。

「現場ごとに、それぞれ気をつけるべきポイントが異なります。経験を積めば積むほど勘が磨かれていくんですよ」。

実際に勘が働くようになったのは、仕事をはじめて10年ほどが経った頃である。

手渡された弁当の思い出

「さくらで働く社員たちは、温かくて魅力的な人ばかり。素晴らしい仲間たちとともに働けることを心から嬉しく、誇らしく思っています」。

今でもありありと思い出せるのは、とある夏の日。昼食にしようと弁当箱を開けると、すぐに異変を察知した。真夏の暑さで、弁当が傷んでいたのだ。無理をして食べたら、間違いなく食中毒になってしまう。一体どうしようかと途方に暮れていると、目の前に新しい弁当が差し出された。顔を上げると、そこに立っていたのは専務の千葉。八巻の弁当が傷んでいるのを見て取った千葉は、自分の弁当を手渡してこういったのだ。

「俺はお腹が減っていないから、お前が食べろ」。

千葉の優しさを肌で感じ、胸がいっぱいになった出来事だ。その他にも、社員の温かさや優しさを実感したシーンは数知れない。いつでも力を貸してくれる仲間たちに深い感謝を抱き、八巻は今日も現場に立つ。

（後編に続く）

企業情報

設 立 年：2012年4月
年　　商：11.6億円
※2022年3月決算時点

必見！大坂さんの仕事術！

自分だけの仕事術を伝授してもらうこのコーナー。今回は、仙台工場の大坂さんをピックアップ！かつての大坂さんは「自分１人が頑張ればそれでいい」と考えていたそう。工場長になり、大坂さんが得た教訓とは……？

仙台工場　工事長
おおさか　だいすけ
大坂 大輔さん

仕事をする上で意識していること

チームワークを大切に、明るい職場を作ること

仕事はもちろん大切なのですが、それと同じくらいに大切なのが、コミュニケーション。いつも明るい雰囲気を作ろうと努力しています。新入社員には積極的に話しかけたり、配置に気を配ったりして、早く溶け込める環境をつくるようにしています。休憩時間に楽しく過ごせるように、自分が盛り上げ役を買って出ることもあります。そのおかげかはわかりませんが、工場内はいつも和気あいあい。楽しい雰囲気で仕事ができています。

意識するようになったきっかけ

１人では何もできない……信頼を大切に

私は若い頃からこの仕事をしていますが、「ここは居心地が悪いな」と思う職場ではあまり長くは働けませんでした。そうした経験から、職場環境を変えていきたいという思いに至ったのです。

工場長になる際にも、コミュニケーションの大切さについて考える機会がありました。現場で働いていた時代には、誰かに仕事を頼むより自分で動くタイプで、１人で頑張ればなんとかなると思っていました。ところが、人をまとめる立場になるとそうはいきません。信頼関係がなければ相手に仕事をしてもらうことはできないと痛感し、よりいっそうチームワークを意識するようになりました。

仕事への良い変化

現場との連携も向上！

私が工場長になる前は、まだ工場で製作を行うことが少ない時代でした。現場の人たちが工場の設備を使って自分たちで必要な物を作り、現場に持っていくスタイルが主流。工場長はおらず、物品も整理されずに置き場所がわからないような状態でした。

工場長に就任したころも、こちらはただ黙って物を運び、現場の人たちもそれをどんどん持っていくだけ。まったく足並みが揃っていませんでした。しかし最近はコミュニケーションを図り、少しずつ連携が取れるように。まだまだ改善は必要ですが、少しずつ前に進んでいます。

後輩へのアドバイス・メッセージ

「元祖さくら」から「次世代のさくら」へ

これからは若者たちの時代。さくら創設時のメンバーと、第２世代、第３世代の入れ替わりのときを迎えています。私はこれまで「元祖さくら」の思いで仕事に取り組んできましたが、若い子たちへ抱いているのは、いい部分を引き継ぎつつ、次世代のさくらを作っていってほしいという願い。私たちにはわからない、若い子にしかできないことがあるはずです。自分たちの時代を築いていってください！

現場紹介 ～雪国まいたけ～

安全を、安心を。
雪国まいたけ

主査
わしお　ゆうや
鷲尾 祐弥さん

高品質な商品を育てるために欠かせない最先端技術によって、安定生産が実現できます。今回は液化LNG天然ガスのボイラー設備における配管工事について紹介します。

工事内容

液化LNG天然ガスのタンクから配管を繋ぎ、ガスを気化してボイラーに送れるようにしています。作業は4~5名で行い、内作を込みで4か月ほどかかります。

担当する期間

内作には7月の1か月を要し、現場作業が8月から10月末までです。

苦労した点

寸法取りとルートが大切！

内作した配管を現場で繋ぎ合わせる作業が大変です。現場の基礎がしっかりできていれば、きっちり繋ぎ合わせることもできますが、プラモデルのようにはいきません。試行錯誤しながら繋げていく必要があり、繋がらないときには配管の改造を余儀なくされます。1度作った配管を作り直すには手間もかかり、溶接したものを再度切って直していきます。自ら現場に赴いて寸法を測っていれば作り直しはありませんが、図面に基づいた内作の場合は仕方がありません。そして建屋、建物やタンクなど高さが水平でないこともあり、少しでも傾いていると配管ルートが変わることもあります。寸法についても、どこの寸法が違うのかを現場で測りながら作業を進めていきます。

仕事をする上で注意していること

できる限り、自分で寸法を測ってミスをなくすようにはしています。そしてあらかじめ図面を見ながら、寸法が合わないと予測した箇所は現場で作業するようにしています。たとえば設置されている機械との兼ね合いで、ルートを変更しなければならない可能性があるかもしれません。何よりも内作する前に図面を見ながら作戦を立てつつ、配管の角度や寸法を正確に測ることが大切です。

目標

お客さまから配管の綺麗さや、納期の早さについて評価いただけるように、今後も期待に応える仕事をしてまいります。

HAPPY BIRTHDAY!

10月がお誕生日の方々です。
ぜひ、皆さんでお祝いしましょう！

10月5日 髙橋 奈緒さん　10月19日 吉田 成人さん　10月20日 森 憲之さん
10月25日 鈴木 淑容さん　10月26日 金沢 亨守さん